

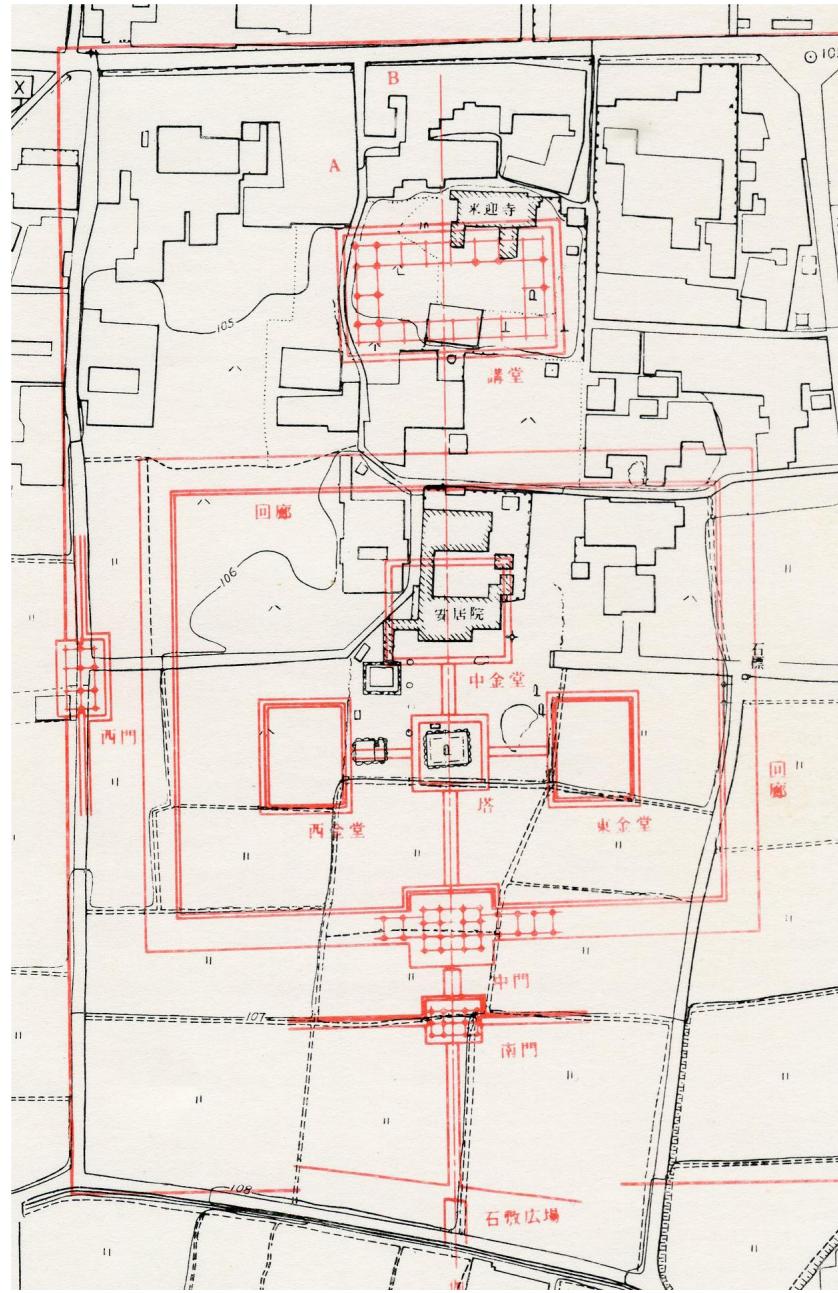
高崎市新町公民館

万葉集講座 第4回

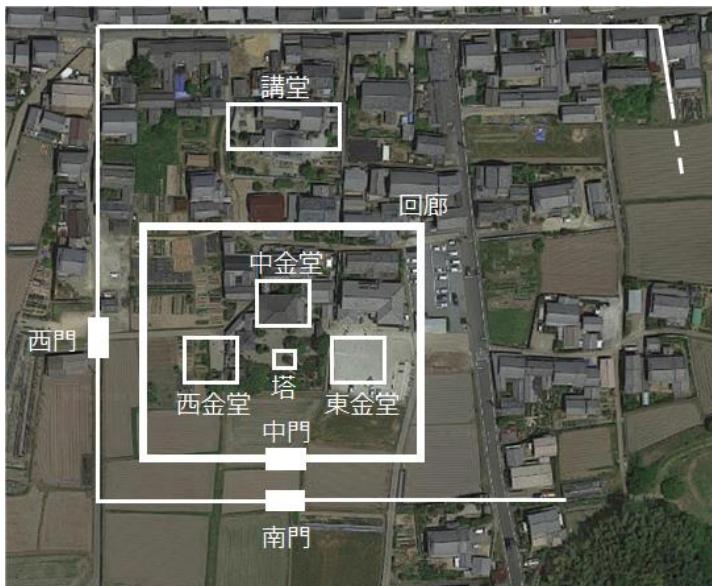
飛鳥寺伽藍配置

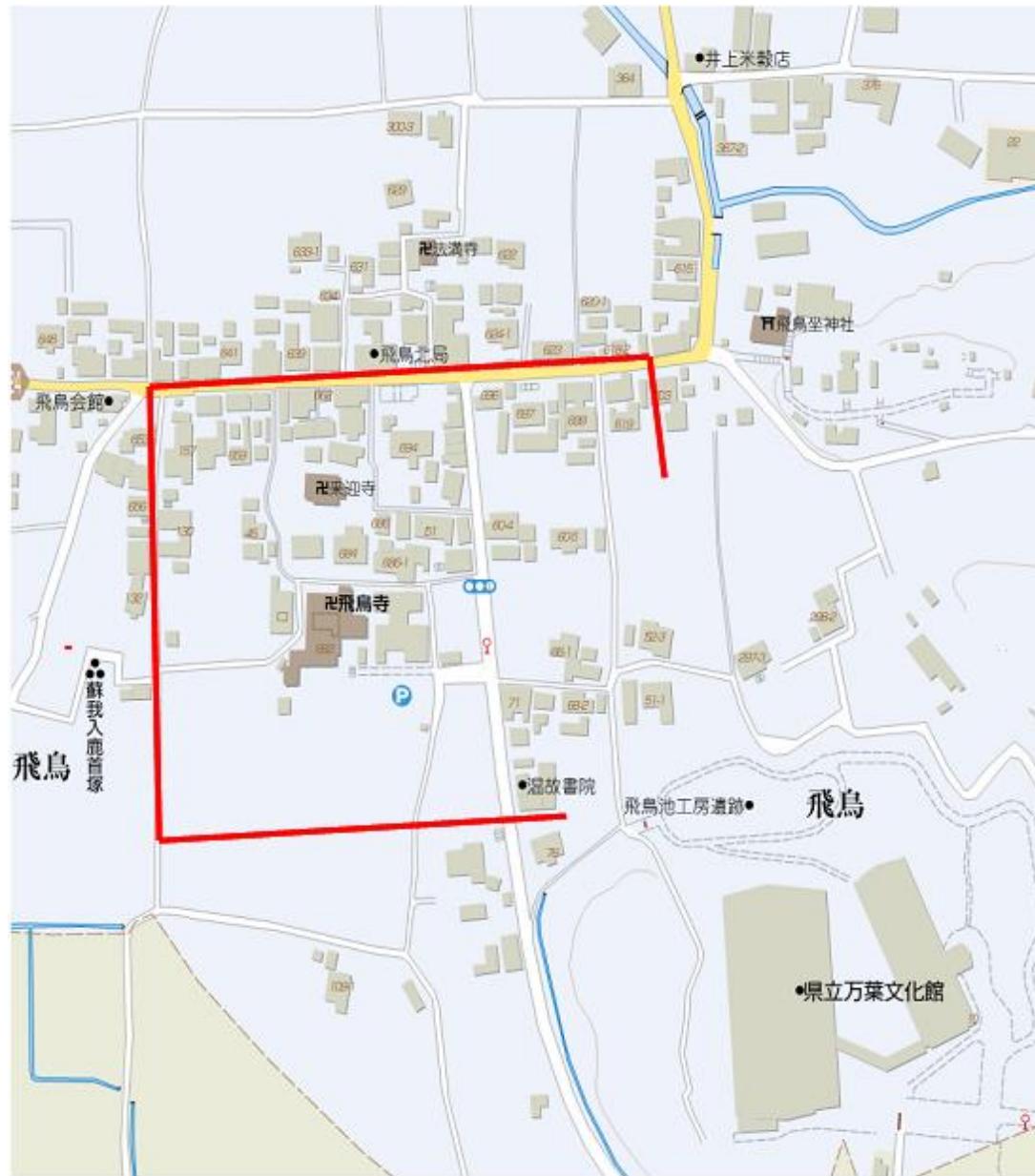
令和七年十二月三日 新町公民館

北川和秀



『飛鳥寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報5）昭和三十三年





同
縮尺



「ゆききの丘」の歌について

故郷の豊浦寺の尼の私房に宴する歌三首（その一首目）秋雑歌

明日香河逝廻丘の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ（八・一五五七）

右の一首は、丹比真人国人のなり。

現在、2句目の「逝廻丘」は、「行き廻^みる丘」が定訓となっている。

「廻^みる」は「めぐる」という意なので、1句目・2句目は「明日香河がその麓をめぐつてある丘」ということになる。

全体の訳は「明日香河が麓を流れる丘の秋萩は、今日降る雨で散つてしまふだろうか」となる。

2句目は古くから「ゆききの丘」と訓まれてきたが、「逝廻」を「ゆきき」と訓むことは無理なので、これは誤読というべきであろう。

こう訓んだ場合、意味的に1句目の「明日香河」と2句目との繋がりも不明確で、1句目・2句目の意味は「明日香河（が傍らを流れる）ゆききの丘の」とでもする他はない。

歌枕・枕詞・序詞・掛詞について

『歌枕』

和歌は古くは、漢語や俗語などはできるだけ避けるようにして詠まっていた。

歌枕とは、歌に使用すべき言葉一般、あるいはそれらの言葉を集成した書物のことを意味した。それが、時代が降るにつれて、次第にその中でも諸国名所旧跡のみについて言うようになつた。

もともと地名の歌枕は実際の風景をもとに親しまれてきたというよりは、その言葉の持つイメージが利用されて和歌に詠まっていた面がある。

多くの歌人によってその地名が詠みつがれるうちに固有の情緒が付着し、その情緒が成長し、やがて固定する。その地名が歌枕で、歌人はそこに行つたことのあるなしにかかわらず、自分の歌に適合した情緒を持つ地名を選んで詠みこんだ。

たとえば「桜」なら「吉野山」「龍田川」なら「紅葉」というように組み合わせがある程度決まってきて、そして本歌取りが行われるようになると、そういう古歌にある組み合わせが受け継がれ、歌枕が持つイメージとして使われるようになつた。

『枕詞』

主として和歌に見られる修辞で、特定の語の前に置いて語調を整えたり、ある種の情緒を添える言葉であるが、風土記の文章にも用いられるなど、散文にも用いられることがある。五音一句（四音や六音もある）からなり、和歌の初句に置かれることが多いが、短歌では第三句に置かれることもあり、長歌では途中の句に置かれることもある。

枕詞の起源は、神名や地名を修飾する呪術的なほめことばと考えられ、古い歌では固有名詞に係るものが多いが、時代が降ると、普通名詞に係るものや用言に係るものも現れる。枕詞の掛け方には、大きく、意味関係で掛かるもの（「草枕」旅など）と、音声関係で掛かるもの（「かき数ふ」一上山など）とに分類できる。万葉集の段階で既に由来の分からなくなってしまっているものも多い。

『序詞』

和歌の修辞の一つで、機能・役割は枕詞によく似ているが、枕詞が原則的に五音であるのに対して、序詞は二句以上からなり、また、枕詞が慣用的・固定的であるのに対しても、序詞は創造的・個別的である点が異なる。

序詞は通常三種に分類している。

比喩による序詞

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を一人かも寝む
ヨウナ

立ちわかれいなばの山の嶺に生ふるまつとし聞かばいま帰り来る
松
待つ

掛詞による序詞

同音反復による序詞

かくとだにえやは伊吹のさしも草さしもしらじな燃ゆる思ひを

『掛詞』

和歌などにおける修辞の一つで、同音異義を利用して一語に複数の意味を持たせたもの。

古今集以降に発達し、万葉集には少ない。

風ふけば沖つしら浪たつ山夜半にや君がひとり越ゆらむ
波が立つ
龍田山（地名）